



第18号

## 🌱 「新しい」緩和ケアセンターの船出

東北大学病院 緩和ケアセンター長 井上 彰

私事で恐縮ですが、昨年5月に緩和医療科長に着任しました。これまで当科を支えてこられた山室先生、中保先生と比べて、緩和ケア医としての実力のみならず人間的にも甚だ未熟なのは自覚しておりますが、東北地区の緩和ケアの発展に精一杯尽力したいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

さて皆さん、2000年の開設時から長年「緩和ケアセンター」の名称で親しまれてきた東北大学病院17階西病棟の看板が「緩和ケア病棟」に変わったことにお気付きでしょうか？少々堅いお話となりますが、当院は宮城県立がんセンターとともに宮城県のがん診療連携拠点病院に指定されていますが、全国の拠点病院においては本年4月までに全く新しい位置づけの「緩和ケアセンター」の設置が国から義務づけられたことにより、当院でも昨年7月より同センターが開設されたのです。

「新しい緩和ケアセンター」は、以下に示す3つの機能を有機的に統合した組織です。

### ①緩和ケア外来

これまで外来B棟1階にある当科の外来は、緩和ケア病棟（旧緩和ケアセンター）への入棟に向けて、患者さん、ご家族と当科医師が面談を行う場でしかなかったのですが、現在は（当院・他院を問わず）他の診療科で通院治療中の患者さんが緩和ケアを必要とした場合、当科外来を併診いただくことで、がんそのものへの治療を受け続けながら様々な辛さに対処することが可能となっています。近年緩和ケアは、いわゆる「終末期（ターミナル）ケア」だけでなく、「がんと診断された時から」患者さんに生じる様々な辛さに対応すべきとされていますが、それを言葉どおり実践しています。さらに、がんに関する情報提供や様々な不安に対するカウンセリングを目的とした「認定看護師によるがん看護外来」も希望に応じて受けていただくことも可能になり、様々な患者さんのニーズに対応できるようになっています。

### ②緩和ケアチーム

当院の各診療科の病棟に入院して何らかの治療を継続中の患者さんが抱える様々な辛さは、従来どおり緩和ケアチームが往診することで対応します。同チームは緩和ケア医、精神科医、認定看護師、薬剤師、栄養士、ソーシャルワーカーなどで構成され、患者さんが抱える様々な悩みについて各々の専門家が知恵を出し合って「チーム医療」を実践します（私も昨年までは「呼吸器内科医」として同チームに参加していました）。従来、チームへの紹介は主治医からの連絡が必要でしたが、現実には主治医が患者さんの辛さに気付かない場合や、患者さんが遠慮して主治医に辛さを訴えない場合も少なからずあるようです。この点を改善すべく、平成28年度からは入院・外来全てのがん患者さんに「苦痛のスクリーニング（拾い上げ調査）」を行うことで、看護師さんその他からの紹介で迅速に緩和ケアチームが対応できるよう急ピッチで準備を進めています。

### ③緩和ケア病棟

そして先述のとおり、長年当院の緩和ケアの中心であった17階の緩和ケア病棟においては引き続き、ご自宅での療養が困難となった患者さんに対して、経験豊富な医療スタッフと多くのボランティアさんが最善の緩和ケアを提供します。病棟医の数は10年

以上2～3名で横ばいでしたが、本年度は4名、次年度にはさらなる増員を予定しています。現在もご協力いただいている音楽療法士や臨床宗教師などとの連携も深め、物心両面を充実させて患者さん、ご家族に良い時間を過ごしていただけるようスタッフ一同努力します。

「新しい」緩和ケアセンターは、各種セミナーや研修会を通じて院内医療スタッフの緩和ケアレベルの向上もはかり、当院における全てのがん患者さんが苦痛なく穏やかな日々を過ごせるよう努めます。皆さまのご支援を何卒よろしくお願い申し上げます。

## 🍃 沈黙が生まれるとき

ボランティア 金田 諦晃

活動に参加させて頂いて約一年が過ぎました。スタッフのみなさま、患者さま、御家族、一人ひとりとの出会いや想いが私の人生に深くしみ込んでくる感覚を覚えます。

さて、わたしたちは普段の生活の中で、他の人と「言葉」を介して意思や感情を伝えあうことで、協力して何かを目指したり、表現をしたり、診断をしたり、説法をしたり、そして時に笑いあったり、ケンカをしたりもします。最近では、テレビやインターネットを通してたくさんの「言葉」が世間にあふれている印象を受けます。それはとても賑やかで楽しく、時には騒々しささえ覚えてしまうこともあると思います。

ある患者さまと、お部屋で会話をしていた時のことでした。その方は、ご自分がこの先どこに向かっていくのか、一体どうなるのかといった、私たち人間にとってもっとも根源的な、深い問いに向き合っておられました。また、私が以前、修行をしていた「永平寺」というお寺のことにご興味があったようで、色々なことを聞いてくださいました。その中で、永平寺の脇を流れる清々しい「川の流れ」について、二人で想像を膨らませていた時のことです。

ふと気が付くと、私たちはお互いに言葉を発することもなく、沈黙の中におりました。それは時間にして30分以上はあったように思います。しばらくして、その方はゆっくりとこちらを見て微笑み、「…深いね…」と一言、柔らかく静かに語り、ふたたびしばらくの間、穏やかな表情で天を眺め、何かを想っていたようでした。とても深い目をされていました。

私は、その「沈黙」にとっても不思議な感覚を覚えました。その沈黙は、お互いに居心地の悪いものではなく温かみのあるものであり、たしかに、互いにその沈黙の中で何かを感じとり、共感していたのではないかと思います。

ここで活動をさせていただいている中で、時折そのような言葉のない「沈黙の場」に立ち会うことがあります。その度に、「あの沈黙にはどんな意味があったのだろう」という、答えのない問いに考えを巡らせます。

私たちは日常、どんなに「言葉」や「行為」を尽くしても、伝わらず、また受け取れない感情や想いがあり、そこにもどかしさを覚えることがあると思います。人と人が本当に分かり合えること、通じ合うとは何か？活動を通して、みなさまから頂いた、大事な問いをご紹介させていただきました。  
(合掌)

## 新たに加わったメンバーより

リラ・ブレカリア（祈りのたて琴） 横山 恭子

今月の7月から緩和、ケア病棟に訪問させていただくこととなりました横山恭子と申します。利用してくださる方のベッドサイドにお伺いして、その方の身体的、精神的、霊的な状態を感じ取りながらハーブと歌声によりさまざまな苦痛を音楽で慰める働きです。音楽療法と似ている部分もありますが「パルストラルハーブ」と表現したほうが適切かと思えます。

この方法の源は11世紀のフランスのクルーニにあったベネディクト派の修道士たちの活動まで遡ります。当時の修道院における医療は手術や薬の服薬を祈りや祝福と結びつけることで、身体のケア（care）と魂の癒し（cure）を行っていたようです。1990年代、アメリカにおいてテレス・シュローダー・シーカー（Therese SchroederSheker）によってこの働きのエッセンスを現代において再現させようと音楽死生理学（music thanatology）の実践と教育が始まりました。使用する局はなじみのない音楽が多く、グレゴリオ聖歌、賛美歌、子守歌などです。理由はなじみの曲は利用される方にとってつらい経験を引き出す事もあため、人間から、安心、安定、平安を引き出すことの出来る曲が選ばれ提供されています。日本ではこの働きが5年前にミュージック・サナトログジストの資格者サック・キャロル氏により始められました。日本では東京に学校があり、現在は2年間の教育課程を終了した卒業生が約50人ほど全国で活躍しています。

これからの利用してくださる方に心を込めて「祈りのたて琴」をお届けしたいと思っています。

看護師 小原 るみ

緩和ケア病棟の勤務は11年ぶりで2度目の勤務になります。先に勤務していた時は、手探りの状況でケアを行っており、今回感じたことは、学び合う環境が整い、看護業務が整理され、緩和ケア病棟のケアが確立されていることでした。医師や看護師だけではなく他職種が連携をし、様々な苦痛症状を緩和し穏やかに安心して過ごせるようお手伝いをしていました。2度目の勤務で私が大切にしていることは、日常生活のケアを丁寧に行なうことです。暮らしを支える援助こそが看護の基本であり、その人らしさを尊重することだと思ふからです。時には困難な場面もありますが、患者様や家族が「ここに来て良かった」と思えるケアを、スタッフの協力を得ながら行なっていきたいと思っています。

看護師 浅野 奈緒子

4月に緩和ケア病棟に配属となりました。外来勤務が長く、緩和ケアに関わるのは就職以来でした。一般病棟とは違いゆっくりとした時間の流れる雰囲気戸惑いながらもボランティアの方々の四季を感じる素敵な作品に心癒されもうすぐ1年が経とうとして

います。まだまだ未熟な私ですが患者さんやご家族の皆さんとの関わりを通して成長している毎日です。学びが多く毎日があっという間に過ぎていきました。

4月から何人かの患者さんをお送りさせていただいておりますがその人らしい最期を迎えるお手伝いできたか自問自答する日々です。今まで何度も迷い、くじけそうになりましたがその度に経験豊富なスタッフ、患者さん、ご家族の言葉に励まされながら現在の私がいます。今までの経験をこれからに活かし、患者様が緩和ケア病棟に入院して良かったと思っていただけるように誠意をもってお手伝いさせていただきたいと思っています。

---

### 看護師 大沼 奈緒美

4月から緩和ケア病棟に異動してきて、気づけば季節は冬を迎えようとしています。ボランティアさんが飾ってくださる季節ごとの花や飾りがあって色彩豊かな病棟だと日々感じています。配属が決まった時から、看護師経験も浅い私が患者さんにできることはなんなんだろうと思いながらやってきて、今もそれを自問自答する日々です。当たり前の話ですが、様々な患者さんがいて、ご家族がいて、それぞれ色々な毎日を過ごし、色々な思いを抱えてこの病棟にやってこられます。私はその毎日にちょっと参加させてもらったり、思いを聞かせてもらったりしているつもりですが、振り返るといつも温かい何かをいただいたような気持ちになります。患者さんやご家族との思い出が増えるほど、最期の時がある、というのはつらいもので、重く苦しい思いを抱える時もありました。でもそんな時に優しく声をかけてくださる先輩スタッフがたくさんいて、そしてやっぱり患者さんたちの優しさに救われるのでした。自分ができることは少なく、悩み・戸惑う毎日ですが、患者さんやご家族の思いに寄り添って、少しでもその「恩返し」ができるようにケアに努めていきたいと思っています。

---

### 看護師 内藤 はるか

4月に異動してきた内藤はるかと申します。以前は当院の腫瘍内科、老年内科、消化器内科の混合病棟で働いていました。特に腫瘍内科では、治療から緩和医療へと移行される患者さんと関わらせていただく機会も多く、沢山の患者さんをこの緩和ケア病棟へと繋ぐお手伝いをさせていただいておりました。その時からずっと、緩和ケア病棟で患者さんがどのように生活されているのかということに関心を持っており、希望叶っての異動となりました。

緩和ケア病棟では、自然や四季、音楽を大切にしており他病棟とくらべゆったりとした時間が流れています。以前は目まぐるしく入退院の患者さんが入れ替わる病棟でしたので、多忙な中で思うように患者さんやご家族と関わる時間が持てないことが悩みでもありましたが、今はじっくりと皆さんに向き合わせていただくことができるようになりました。勿論新たな課題も沢山生まれる日々ですが、皆さんと出逢うことができたご縁と、大切な人生の時間に関わらせていただけること、その中で多くの学びを与えていただいていることに感謝の気持ちでいっぱいです。

日本には自然を愛し敬う文化があります。植物に囲まれ、四季折々のイベントを楽し

み、音楽で心のビタミンを摂りながら過ごせるこの病棟の環境は本当に有り難いものです。私たちには生まれながらに寿命を全うするという試練を与えられています。人生はまさに修行とも言えるのかもしれませんが、人と人との関わりの中で愛情や思いやりを感じ、喜びを得ることで試練を乗り越える力が漲ってくるように思います。私も修行の身ではありませんが、少しでもみなさんの人生を生き抜く力となることができればと思っています。

若輩者の私でありますので皆さんにはご迷惑をおかけすることも多々あるかと思いますが、『昨日より成長した今日の自分』を積み重ねて参りますのでどうぞ宜しくお願い致します。

---

### 看護師 斑目 享子

昨年4月から緩和ケア病棟のスタッフとして勤務させていただいております。看護師になって十数年、一般病棟に勤務する中でがん看護、緩和ケアを学びながら、いつか勤務したいと思っていた念願の緩和ケア病棟の一員となり、わずか1年足らずですが多くの患者さん、ご家族との出逢いとお別れを経験させていただきました。死に直面した患者さん、ご家族の揺れ動く気持ちに寄り添い、丁寧にケアをさせて頂くことの大切さを実感し、難しさに戸惑い、悩みながらでしたが、先輩スタッフの方々の関わり方や声かけの仕方、様々な配慮にたくさん学ばせていただき、まわりのみなさんの笑顔やユーモアに励まされた日々でした。

今回お腹に新しい命を授からせていただくことができ、間もなく産休に入らせていただきます。スタッフの皆さんにはいつも体調を気遣った温かい声をかけていただき、助けていただいたおかげで無事に勤めることができます。患者さんやご家族にも「元気に産まれておいでね。」とたくさんお腹を撫でていただきました。これまでになく命の尊さを実感した一年だったように思います。しばらくは育児に専念しますが、またいつかみなさんとお会いできるご縁をいただきたいなと思っています。



## 2015年のイベント

### 七夕コンサート



### クリスマスコンサート



みなさんの作品



編集後記

今年も皆さまのご協力のおかげで無事に「七つ森第18号」を発行することができました。

皆さまの思いが詰まっておりますので、一度お手にとっていただければ幸いです。

今後とも、緩和ケア病棟と「七つ森」をよろしくお願い致します。

七つ森

Nanatsu-mori

第18号

平成28年3月1日発行  
東北大学病院 緩和ケアセンター  
〒980-8574

仙台市青葉区星陵町1-1

TEL : 022-717-7986

FAX : 022-717-7989

<http://www.pcc.med.tohoku.ac.jp>

印刷：株式会社仙台共同印刷